

---

# ある少年の物語

リオン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ある少年の物語

### 【著者名】

リオン

### 【あらすじ】

西暦2300年。地球には地球外からの魔の手が襲い掛かっていった。日に日に激化していく戦いの炎。ついに国連はガンダムの投入を決意したのだった……

## 崩れた日常（前書き）

へつたくな文章ですが、よろしくお願ひいたします

## 崩れた日常

青く晴れ渡つた雲一つない空。

そんな気持ちのいい毎の空の下のとある学校。

この学校、今の時間はお昼休みらしく中庭で昼食を食べる生徒や、友人達とグラウンドで遊んでいる生徒が多く伺える。

そんな中、屋上で一人新聞紙を片手に寝そべっている少年がいた。

「ふーん……ガンダム投入ねえ……」

この少年の名は、

『一ノ瀬 隼人』

この学校に通うじく普通の高校一年生。成績は悪くはないが良くもない、運動だつてそこそこできる。またに普通を絵に描いたような少年だ。唯一自慢できることとつたら、購買のパンを全種類食べたといふことぐらいだらつ。

「隼人ー！」

彼が新聞に目を通してると、頭上の方から彼の名前を呼ぶ声が聞こえた。

「ん?.....」

この声に気付き体を起こすと、一人の少女が自分の元へ走つてくる姿が目に入った。

「葵か。どうした?」

「あんた放送聞こえなかつたのー?」

放送?はてなんだろう?といったような表情をする隼人に對し、やれやれという表情を見せるこの少女、

『高宮 葵』

隼人の幼なじみで同じクラスの高校二年生。身長はあまり高くはないが、肩まで掛かる茶色い髪の毛、ぱっちりとした目に、綺麗な瞳がどこか大人っぽさを漂わせていた。

「大至急校長室に来なさいだつてさ。あんた何したの?校長室に呼ばれるつて相当のことでしょう?」

隼人は何か怒られるようなことをしたかと自分の記憶を辿り始める。

「んー……」

しかし、思い当たる節が見つからない。

「とにかく行つてくるわ。新聞、俺の机の上にでも置いといてくれ。」

そう言つて新聞を葵に投げ渡し、校長室へ向かつて走り去つた。

校長室に着いた隼人は、自分の身なりを軽く整え、不安を少しでも和らげるために大きく深呼吸を三回し、恐る恐るノックをして校長室に入った。

「失礼しまーす。遅くなつてすんませーん。一ノ瀬ですー。」

校長室には、髪もすっかり薄くなつてしまつた校長がフカフカのいかにも高級そうなソファーアに座つていた。

その向かい側には、長く綺麗な黒髪が印象的な、可愛いと言つよりは美しい女性が座つていた。

「せつかぐの昼休みにすまんね、一ノ瀬君。」

「あ、いえ、俺も遅くなつてすんません。」

「まあ座ってくれ」

校長に促され隼人は少し間を空けて校長の隣に座る。怒られるようなことをした覚えのない隼人は何故呼び出されたかを尋ねた。

「実はの、君に用事があるのは、わしではなくて彼女なんだ」

その言葉と同時に校長の右手が女性の方を指した。

とりあえず怒られはしないと思った隼人は少し気が楽になつたが、こんな美人さんが俺にわざわざ学校まで来て何の用があるのでどうと、何か嫌な予感がしていた。

「じゃあ橘君、後は君から頼むよ」

そう言わると橘と呼ばれる女性は一言「はい」と返事をし、鞄から名刺一枚取り出して隼人に差し出した。

「はじめまして一ノ瀬君、私このうう者です。」

差し出された名刺には

『橘 凜』

と、名前が書かれていて、その隣にはこの人の肩書なのだろうか  
『国連軍特殊機動部隊』  
と、書かれていた。

「えーと……国連の方なんですか？」

「はい、そうです」

「国連の方が俺にどういった用でしうか……？」

全く予想していなかつた所からの来客に、隼人の嫌な予感は増すばかり。

「二コースなんかで国連が戦いにガンダムを投入するつて話を聞いてない？」

そういえば、つこせつきまで読んでいた新聞にそんなようなことが

書いてあつたことを思い出した。

「一応知りますけど……それがなにか？」

隼人は思つてもなかつただろう。この凜の言葉が自分の運命を大きく変えることになるだなんて。

「单刀直入に言うわ。一ノ瀬君……ガンダムのパイロットになつてほしいの！」

「…………え？」

この瞬間、一ノ瀬隼人の「」く普通の日常は、音をたてて崩れた。

## 崩れた日常（後書き）

ありがとうございました

評価、感想お待ちしています

次回もよろしくお願ひします

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5844m/>

---

ある少年の物語

2010年10月9日20時10分発行